

特集 いま平和学習を考える

今年は今行安保条約改定から50年目を迎えますが、沖縄の人たちは依然として、アメリカ軍基地をめぐる基地の重圧に苦しんでいます。

また今年には日本による韓国併合100年目にもあたります。日本の侵略戦争については、日本国内にこれを反省せず、自虐史観として反対する根強い抵抗があります。

また一方では、核兵器廃絶をめざす国際的運動が今年には大きく進展した年でもありません。

そのなかで戦争を体験した世代である七十年代、八十年代の方たちの高齢化がすすんでいます。戦争を自分の体験として自分の口で語れる世代が次第に失われつつあります。戦争体験をひきつぐことは今を生きる世代の避けることのできない責務となっています。

そのためには学校教育の場ではなにが必要なの

か考えることが大切です。平和教育の実践を通して考えてみました。

神奈川県津田憲一さんからはご本人が直接、「集団自決」のあった沖縄県座間味島に出かけて「戦世」の証言を聞き取り、それを生徒に伝えた授業の実践を報告していただきました。

証言集『座間味旅日記』は、津田さんの解説文を一部、ご本人の了解を得て割愛しましたが、地元の方々の「集団自決」についての証言部分は一語をのぞいてそのまま掲載しました。なかには家族にも話したことのない「集団自決」をはじめ、語った方もおられ、貴重な証言になっています。

編集部